南潯・湖社・国民党

桑　　兵
（小野寺史郎　訳）

はじめに …… 169
Ⅰ　南潯と国民党 …… 170
Ⅱ　湖社と南潯 …… 176
Ⅲ　湖社と国民党 …… 181
おわりに …… 187

はじめに

1970年代以降、中国研究において区域研究が次第に流行した。その背景には、中国は面積が広く、差異が顕著なため、漠然とまとめて論じることが難しいという事情に加え、国外の学問分野から影響を受けて、中国を相互に独立した地方社会に区分することがよく行われるという理由もある。近代以来の「地方」なるものは、政治学的な意味であっても社会学的な意味であっても、中国の元々の考え方や実情とかけはなれており、牽強付会を引き起こしやすい。そのため、ある地方内部の凝集性と特殊性を強調する反面、その外部との広範なつながりについては無視しがちである。ひどい時には、地方の区分自体が主観的な後付の色彩を強く帯びている場合さえある。中国の歴史においては、常に離合集散が繰り返され、それぞれの地方にそれぞれある程度の特殊性が生まれたが、その一方で他の地方との広範で密接なつながりも存在し続けた。全体から局部を観察すべきなのであって、地方の視角からのみものを見るのは適切ではない。

以上のことは特に中心都市の研究において重要である。清代から民国にかけて、一部の都市や市鎮が、地理的な位置や富の蓄積、文化的な伝統といった要因から人材の集積地と

なった。それらは区域の中心となっただけでなく、地縁、そしてそこから生まれた血縁・姻戚・同学・師友・同業・同行といった様々な関係・紐帯による結びつきが、全国範囲の政治・経済・文化に反映し影響を及ぼした。たとえば、清代中期の揚州、19世紀前期の広州、そして後の上海などがそれにあたる。大都会以外でも、一部の小都市は、中国特有の歴史的・社会的要因、特に都市と農村の境界が明確でないという社会構造の下で、一地方あるいは特定の区域をはるかに越える地位や影響力を持った。清末民初の江南の名鎮は、その富を背景に、勢力を拡大し続けた。浙江省湖州呉興の南潯鎮はその中でも突出した事例である。

この種の都市が歴史上果たした役割とその影響について、ただ社会経済史の枠組からのみ考察するのでは、木を見て森を見ず、群盲象を撫でる、であり、偏った見方に陥りやすく、その全体像を正しく認識するのは難しい。また郷土史の著作は、厳密に資料を選別しているわけではないため、巷間の伝聞と史実の記録が入り混じっており、あまり信頼できない。南潯と近代中国の関わりは様々なレベルに及ぶため、一本の論文でそれを充分に論じることは不可能である。筆者が10年前に書いた「先鋒与本体的衝突――壬寅潯溪公学第二次風潮述論」（『中華文史論叢』2001年第3期）は、南潯の潯溪公学の紛争を主題に、新式学堂とその学生に対して、様々な方面がそれぞれ異なる期待を抱いていたこと、そしてそれによって生じた矛盾や衝突について検討し、南潯が近代新式教育の導入と学生の集団意識形成の点で先駆的な地位にあったことを示した。本稿は湖社を軸に、南潯と国民党の人脈的なつながりの起源と、その政治的影響について明らかにする。

Ⅰ　南潯と国民党

南潯鎮は浙江省の北部、湖州市の東部にあり、太湖流域の杭嘉湖平原上に位置する。上海・杭州からはいずれも120 km、蘇州からは51 km離れている。江南の名鎮として知られる震沢に隣接しており、もう一つの名鎮である同里からもほど近い。南潯は湖州に属すが、近代以降、湖州は何度か呉興と改称された。辛亥革命の際には市に改組されたこともある。現在の湖州市南潯区は複数の鎮を含むもので、区政府が南潯鎮に置かれている。南潯鎮は750年の歴史を持つが、明の万暦年間から清代中期にかけてがその最も繁栄した時代だった。清代には江南に四大名鎮ありと謳われたが、南潯はその筆頭として、同里・黎里・震沢とともに名を連ねた。

清代の南潯鎮は「煙火万家」（炊事の煙が万を数える）と号したが、現在の研究によると、これは周囲の郷村まで含んだ数という可能性が高い。確実な統計資料としては、清末新政

の際の県以下各選挙区の戸口調査があるが、既に見ることができない。1920年代後期には、糸業の衰退によって南潯の社会的・経済的な地位は急落し、人口も次第に減少した。1929年、呉興県第三区は6鎮27郷に分けられたが、南潯鎮は戸口が多かったので、運河上鎮・運河下鎮・南東鎮・南西鎮・東北鎮・西北鎮の6つの鎮に分割された。合わせて4223戸、1万9889人である。1948年秋の南潯鎮公所の戸口調査になると、3300戸、1万3030人だった。1953年には、南潯鎮には1万2446人が住み、うちわけは非農業人口1万1730人、農業人口716人だった[(1)]。

しかし、南潯の人口をその社会的地位や実力の指標と見なすことはできない。なぜなら南潯には豪商が多く、その多くは上海に居住していたからである。報道によれば、清末の南潯鎮の各家は合わせて100艘以上の汽船を所有し、上海との往来に利用していたという。南潯では古来より糸業（蚕糸業と繰糸業）が盛んで、「耕桑之富、甲於浙右」（米と絹の富は、浙東で一番である）、「湖州一座城、勿及南潯半個鎮」（湖州一城は、南潯鎮の半分に及ばない）とまで言われた。近代中国最大の糸商グループ（湖商・潯商と呼ばれた）の存在によって、南潯は清末には大商人の雲集する全国蚕糸交易の中心地となった。清末には全鎮の6割以上の農民が紡経を生業としており、最盛期には糸経行は56軒に上った。清末民初には、南潯には42軒の糸桟があった。上海の91軒の糸経行のうち、70％は南潯人が開設したものだった。1847年、上海港の蚕糸輸出量は2万1176包だったが、うち南潯のものは1万3426包で、全体の63.3％を占めた。1870年の中国の蚕糸輸出は5万担、1892年の輸出量は10万担を超えたが、その大部分はやはり南潯輯里糸だった[(2)]。1912年から1934年まで、輯里糸は平均で上海の生糸輸出量の38％を占めた。1929年以降、輸出量は激減し、1934年にはわずか300包にまで落ち込んだ。

糸業の盛んだった時代には、南潯の豪商はその財力をもとに、他の業種にも経営を拡大した。もともと南潯の豪商はいずれも糸業のみに依拠して成立したわけではなかったが、それに加えて武器取引・買辦・塩業といった分野に進出し、さらに不動産業・典当業・金融業などに及んだ。後には、近代交通・工業・銀行・不動産などにも投資を行っている。彼らが創設した近代企業としては、やはり糸業（繰糸・糸織・糸綢）が主で、それと並行して製紙業などを営んでいたが、鉄道・水運・銀行・保険といった分野にも参入していた。上海の娯楽界・百貨店・運動場などに関わる者もあった。銀行・証券についてだけ見ても、南潯の豪商が創設したあるいは関与したものには次のような例がある。1907年11月、劉錦藻・張澹如・龐元済・張鈞衡（石銘）・周慶雲・張弁群らが浙江興業銀行の設立に参与。1909年、張静江が上海に通義銀行を設立。1913年、張静江・周佩箴らが上海に中華実業銀行を設立。1920年、周佩箴・張静江・張澹如が上海で虞洽卿らと上海証券交易所を創設、

周佩箴が常務理事、張静江が監事となった。1924年、大陸銀行が南潯に分行を開設すると、龐惟錫が初代経理となった。また劉錦藻は浙江鉄路公司の創設に参与して同公司の副総経理となり、張鈞衡・張宝善・周慶雲・蔣汝藻が董事となった。

庶民は宮廷や富豪に対して、好奇心を持ちつつ、実情を知ることができなかったので、巷には様々なうわさが流れ、彼らの想像力を刺激した。南潯の豪商の成功とその財産の額について、最も舌を巻くのは「四象、八牛、七十二狗」という表現である。これは、財産を基準に豪商の等級を表したものである。1930年代に劉大鈞が書いた『呉興農村経済』によれば、「財産が100万以上に達するものを「象」と言い、50万以上100万未満のものを「牛」と言い、30万以上50万未満のものを「狗」に譬える。「象」・「牛」・「狗」の体の大小が、糸商の財産の多寡を表しているのである」(3)。林黎元が書いた「四象八牛」になると、「資産が洋銀500万元以上のものを「象」と言い、100万元以上のものを「牛」と言い、10万元以上のものを「狗」という」と変わる(4)。近年ではさらに大げさに、「四象」の身代は1000万両以上、「八牛」は100万両以上、「七十二狗」は30万両以上、ということにまでなっている。合計は8000万両に達することになるが、これは清末の政府の一年分の収入に相当する。劉大鈞がすでに指摘しているように、調査と噂話とは区別しなければならない。斉東の野語はもって拠となし難し、である。たとえば、資産が100万以上なのは4家だけではない、「四象」のうち劉家・張家の身代は1500万両を超えるため、「象中之獅」とも呼ばれた、「八牛」の邢・邱・梅・謝といった家の資産も100万を超え、「四象」の龐家に迫る、加えて、それぞれの等級に含まれる家名も、今と昔で違っている部分がある、といったものがそれである(5)。考証しようがない事柄なので、樊樹志の書いた『江南市鎮』に至っては、「四象八牛」については、劉大鈞の文章を書き写しているだけである。しかし、劉大鈞も当時自ら調査に赴いたわけでなく、中国経済統計研究所が派遣した調査員も、時間が切迫していたので、資料収集は容易でなく、深く踏み込むことができなかった。書中で財産の額は時代とともに変動するものであり、また財産の額は秘密であり部外者が知ることはできない、という二つの原因を挙げており、後の郷土史家もやはりその関連記述について正しいとは思っていないのではあるが(6)。

南潯地方は長きに渡り豊かであったため、文化の気風が強く、官に仕えた者も多かった。宋代から清代まで、合計41人の進士を排出し、明代には「九里三閣老、十里両尚書」(9里の範囲から3人の内閣大学士、10里の範囲から2人の尚書が出た)という俚諺があった。統計によると、宋・元・明・清時代に、南潯籍の京官は56人、明・清時代に全国各地の州県官となった者は57人いた。南宋から民国まで、全国レベルの影響力をもった南潯籍の学者は80人余りに達する。清末民初に南潯が急速に豊かになると、商業・産業に加え、

伝統を継承し、時局に影響を受けて、政治・文化の領域に発展が向かった。清朝の文治思想と、地方官による学問奨励の影響を受けて、清代の商人は文化を重んじ、「儒商」となることを目標とした。南潯の豪商の子弟は、揚州などの商業界の気風を模範として、著述・絵画・収蔵・器物鑑賞などを好み、多くの名家を輩出した。著述には、劉錦藻の『清続文献通考』、龐元済の『虚斎名画録』、周慶雲の『塩法通志』などがあり、絵画では北京で中国画学研究会を組織した金紹城が最も名高いが、その兄弟姉妹や子の世代にも画に巧みな者が多かった。蔵書では劉承幹の嘉業堂の他、南潯には有名な蔵書楼が数多く存在した。劉桐建の眠琴山館、蔣汝藻の密韻楼、張鈞衡の六宜閣、周夢坡の夢坡室、厳元照の芳芋堂、龐元済の半画閣などである。

清朝の遺老をもって自任した劉承幹は学界における交友関係が広かった。1916年、劉承幹は上海で淞社を組織した。『学樵自訂年譜』には次のようにある。

> 翰怡〔劉承幹の字〕と周湘舲〔「八牛」周家の周慶雲〕が淞社を主宰した。集まったのは、藝風、子頌、鞠裳、息存、梅庵、叔問、橘農、元素、聚卿、積余、金粟香、銭徳邠、呉倉碩、劉謙甫、王旭荘、劉語石、汪淵若、戴子開、金甸丞、惲孟楽、季申、瑾叔、崔磐石、宗子戴、潘蘭史、王静安、洪鷺汀、陶拙存、朱念陶、褚礼堂、夏剣丞、張孟劬、姚東木だった。交互に主客となり、乙庵と文章を論じた[(7)]。

同社の参加者はほとんどが上海の著名人だった。彼らは政治的には必ずしも劉承幹の遺老コンプレックスを共有していなかったものの、文化的にはほとんどが固有文化を固守する志向を持ち、政治的な王朝交代が学術・文化的な全面刷新を招いたことを憂いていた。

文化事業に打ち込んだ者たちと異なり、政界への関与について言えば、南潯の商家はより革新的な傾向が強かったため、ほとんどが改革あるいは反清革命の道に進み、したがって国民党と関係を持つようになった。南潯と政界の関係は、一方では南潯が外部の革新人士を引き付けたことによるものだが、より重要なのは、南潯人士が国家や世界の潮流に積極的に反応し主体的に関心を持ったことである。前者について言えば、南潯は教育の発展が早く、既存の潯溪書院が1898年に改組され、時務・策論課程を増設し、湯寿潜が山長に就任した。1900年には蔣観雲が後任となり、さらに西学課程を増設した。1902年には、同書院と明理学塾が合併して潯溪両等小学となった。一説には、蔡元培が山長を務めたこともあったという。1902年、龐青城が潯溪公学を設立し、杜亜泉（後の『東方雑誌』主編）を総教習に、葉瀚（1900年に中国国会書記、後に北京大学教授）・邵力子らを教習に招き、学生の中には後に著名なジャーナリストとなる黄遠庸がおり、関係者には蔡元培がいた[(8)]。

張弁群は1903年に正蒙学社を設立したが、招聘した教師には、後に北京大学教授になる沈士遠・沈尹黙兄弟がおり、学生には朱家驊[9]や葉楚傖がいた。1906年には、張弁群が上海愛国女学の前例に倣って潯溪女学を設立したが、この時ちょうど秋瑾が留学生の紛争事件のために日本から帰国しており、浙江の革命党員である敖嘉熊の紹介で同校の教員となった[10]。そのため、南潯人士と中国の近代教育とは非常に深い関係にあった。1923年には、張増熙の子の張乃燕が浙江省教育会の会長に当選した。1925年には、張乃燕は国立広東大学の校長に任命され、1927年11月からは中央大学の初代校長を兼任した。

後者について言えば、新興政治勢力と比較的関係が深かったのは、「四象」の張・龐両家と、「八牛」の周家である。1906年11月、予備立憲公会が上海で成立すると、周慶雲・蔣汝藻・張増熙・張澹如が会員となった。1909年に浙江諮議局が成立すると、龐青城がその議員となった。張静江・張弁群・龐青城・周佩箴・周柏年らは、いずれも古くからの同盟会員であり、長期にわたり秘密裏に革命活動に従事し、辛亥革命の際には上海や杭州の蜂起に参加した。張静江は国民党の元老であり、国民党・国民政府の要職を歴任した。1924年1月、張静江は国民党第1次全国代表大会で中央執行委員に当選し、後に広州国民政府常務委員、国民党中央監察委員会常務委員、国民党中央常務委員会主席、浙江省主席などを歴任した。周柏年も国民党中央常務委員会秘書長になったことがある。他にも周佩箴の長兄の周頌西は国民党上海執行部交際部副部長（部長は瞿秋白）を務めている。「七十二狗」の呉楼張家の張廷灝は、1924年に毛沢東が国民党上海執行部組織部秘書を去った際の後任である[11]。

しかし、南潯は商業で富を築いた土地であり、政治への参与に際しても、その長所を発揮し、財力によって貢献した。秘密に関わることであるため、様々な説があって、考証は容易でなく、さらに資料を集める余地もあるものの、民国初年に戴季陶が書いた「龐青城事略」は、龐本人から直接情報を得たものであり、その内容は比較的信頼性が高い。その中では龐の革命事業に対する資金援助の事例として、次のものが挙げられている。

1906年冬、楊篤生（毓麟）が『神州日報』館の買収を提案し、3000元の寄付を募ると、気前よくこれに応じた。

1907年、中国同盟会に加入。孫文の鎮南関蜂起に際し、軍費5000元を援助した。同年冬、同志張某が劉光漢（師培）の密告で逮捕されると、300元を使って弁護士を雇ったが、及ばなかった。

1908年秋、張静江と東益昌票号を設立、革命のための金融機関とした。

1909年、数万元を援助して『民呼報』を創刊し、于右任を主任とした。同年夏、日本に商業の視察に赴いたが、于右任が宝熙の悪事を暴いたために逮捕されたと聞いて即座に

帰国し、4000元余を使って弁護士を雇い、于を出獄させた。

1910年春、東益昌号経理李燧生（非同盟会員）による14万元の巨額横領事件により、家産の半ばを失う。

1911年春、広州黄花崗蜂起に際し、1000元を援助する。敗報と、同志70人余の死を聞き、悲憤慷慨する。武昌蜂起の後、5000元余を援助する。南京での新軍蜂起は、武器の不足により、張勲に鎮圧された。同年冬、家屋を担保に3万元を借り、藍天蔚の北伐軍費とした。

1912年春、同志が上海に同盟会本部を組織したので、1000元を援助した。

龐家は「四象」の第3位だったとはいえ、実際の財産総額は160万両に過ぎず、その上大半は青城の兄の龐元済（萊臣）が管理していた。革命運動に対する資金援助の他にも、龐青城は前後して潯溪公学や述志医院といった新事業の創設、馬相伯の復旦公学への資金援助、青城造紙廠の設立などを行っており、動かせる金額は限られていた。これについて、戴季陶は次のように称賛している。

> 安きを好み危きを憎むのは人情の常であり、平和な時勢にあって危険な事業に力を注ぐというのは、卓見の士でなければできないことである。……我が郷中で、革命思想を抱き、健児の隊伍に加わったのは、南潯の張静江、龐青城が最も早かった。……青城は長者に生まれて豪邸に育ち、静江のように、風に乗り万里の波を破る、ということはできなかったが、まず社会事業に従事し、ついで革命団体に身を投じ、家を傾けることも惜しまず、共和の新国家の成立を促した。人傑というべきであろう(12)。

豪商という背景と、理財に長じたことから、南潯人士が政権に加わる際には、多くの場合財政の要職に着いた。1912年に南京臨時政府が成立すると、龐青城が実業部商政司司長となった。中華革命党期には、張静江が財政部長となった。1928年2月、国民政府が中華民国建設委員会を設立すると、やはり張静江が主席となった。周佩箴は辛亥革命に際して浙江省官産処処長となった。周は1923年1月には国民党財務部副部長となり、後に広東省政府委員兼土地庁庁長、広東沙田清理処処長、黄埔商埠公司執行委員、上海中央銀行籌備主任、財政部杭州造幣廠廠長、審計部主任秘書兼総務処処長などを歴任。さらに中央銀行・中国農民銀行・亜東銀行・交通銀行など多くの銀行で常務董事・総経理・董事長などを務めた。張乃燕も中華民国建設委員会副主席を務めたことがある。

南潯の豪商とその子弟が政治的に革新の傾向があったのには、おおまかにいくつか理由がある。一つは、国外への遊歴や留学である。張静江・張弁群・龐青城・周柏年らはそれぞれ欧米・日本に商業の視察や留学に赴いており、文明の空気に触れ、新思想の洗礼を受

けた。二つ目に、南潯の各家はそれぞれに結びつきがあり、同郷であるという以外に、様々な親類・交友関係が存在した。張静江は兄の張弁群、舅の龐青城、友人の周佩箴らが同盟会に加入する際の紹介者となった。三つめに、上海のような大都会に住んでいたため、思想が開明的で、交際範囲も広かったということがある。そのため、様々な新事業や新人物と接触する機会があったのである。以上に述べた人間関係は、他の湖州人士にも間接的に影響を及ぼした。張静江・龐青城・周柏年らはそれを通じて陳其美・戴季陶・朱家驊らと知り合っている。

Ⅱ　湖社と南潯

民国期の中国には「湖社」という団体が二つあり、成立時期も近いが、いずれも南潯と関係が深い。一つは南潯金家の金城（1878–1926、原名は紹城、字は拱北、号は北楼、別号は藕湖漁隠）が組織した中国画学研究会から生まれた湖社画会である。中国画学研究会は1920年5月に北京で成立した。実際の創始者は金城だが、北京政府の援助を得るため、周肇祥を会長とし、金城が会務を取り仕切った。1926年9月、金城が病死すると、子の金開藩は周肇祥と意見が合わず、一部の金城の弟子を率いて別に画会を組織し、「湖社画会」と名付け、金城を記念した。社屋はやはり北京に置かれたが、後に全国各都市に相次いで分会が設立され、また『湖社月刊』を出版した。「北湖社」とも呼ばれる[13]。近年、近代国画の歴史についての研究が注目を集めているが、湖社画会はその焦点の一つとなっている。

それと比べて、本稿が検討するもう一つの湖社は、しかるべき重視を未だ受けていない。近年、湖州と南潯は地方史家の注目を大いに集めているものの、それらの著作においてもこの湖社への言及は少ない。郭緒印『老上海的同郷団体』（文匯出版社、2003年）の第10章「湖州商幇及湖社」が比較的詳しい概説と言える程度である。他にも方福祥が書いた「上海湖社的抗日救国活動」（『上海修志向導』1995年第4期）がある。この湖社は成立が前述の湖社画会より早く、また湖州地方そして全国の政局に対してより大きな影響を与えている。

湖社の起源について、戴季陶は次のように述べている。

> 昨年、湖州の同郷諸君が、たまたま何か活動を起こそうと思いつき、この湖社という団体を発起した。その直後に偶然この会に出くわしたのだが、私も上海におり、また湖社を発起した同郷諸君の中には私の親類や友人も少なくなかった。そこで互いに

推薦し合って、私も湖社の発起人に名を連ねることになったのである。後に湖社が成立すると、浮草のような一介の浪人だったのにもかまわず、みなが私を同社の職員に推挙してくれた[14]。

1925年3月29日に開かれた湖社大会で主席が行った初年度の社務報告によれば、同社が「昨年6月1日に成立してから本年3月まで、10カ月がたった。ただ我が社の発起は実際には昨年3月30日の倚虹楼の会議に始まるので、本日でちょうど1年である」[15]。

ここから、湖社が上海で正式に成立したのは1924年6月1日だが、その2カ月前には既に準備が始まっていたことが分かる。新聞の関連報道としては、1924年3月31日の『申報』に次のようにある。

上海在住の湖州人たちが、湖州地方と在外湖州人がばらばらな現状に鑑み、団結のために湖社の組織を提案し、昨日午後3時、倚虹楼で発起人会を開いた。戴季陶を主席に選び、開会の主旨を説明し、会規の草案を決定し、準備委員に楊譜笙・陳藹士・戴季陶・陳果文〔夫〕・周由厪・湯済滄・潘公展・厳濬宣・周越然の9人を選出した。ただ戴君はまもなく上海を離れるということで、次点の沈田莘が繰り上げ当選となった。閉会時にはすでに6時を過ぎていた[16]。

同日の『民国日報』にも全く同じ記事が掲載されている[17]。これらの報道によれば、倚虹楼の会議は湖社の組織を決めただけでなく、同社の会規草案を決定し、準備委員を選出しているため、正式な準備会と見なすべきであり、一般に言われるような実務と無関係の懇親会といった性格のものではない。

『申報』と『民国日報』はいずれも湖社の正式成立について即座に報じるということはしていない。6月4日になって、『民国日報』が「湖社之縁起与簡章」と題した記事を掲載し、同社成立前後の状況について報じている。

上海在住の湖州人たちが発起した湖社が、先日成立大会を開き、会規を決定し、委員21人を選出した。聞くところでは7日午後4時に辣斐徳路の臨時通信所で第1回委員会を開き、理事を互選し、社務について討論することとし、すでに通告を発したという。また聞くところでは、同社社員は上海在住の同郷人に限らず、同社の趣旨に賛同する湖州人であれば、誰でも歓迎するという。

大会で決定された全9条の簡章によれば、湖社の趣旨は「湖州府6県と在外の同郷人の事業の発展を図る」ことであり、そこには正義を守ること、建設事業の検討、地方自治の促進、民衆教育の支援などが含まれる。その具体的な方法としては、調査・研究・講演・出版・実施などが挙げられている。組織の面では、湖州府6県の同郷人で、同社の趣旨に賛同し、社務への参加を希望する者であれば、男女を問わず誰でも、社員2人以上の紹介と理事会の承認を経て、社員となることができる。社員選挙で選ばれた委員21人で委員会を組織し、委員の互選によって選ばれた理事7人で理事会を構成し、さらにその互選で主席理事1人を置く。理事と委員の任期は1年だが、再選は可能である。理事会は事務員を置き、事務規程を定めることができる。職員はいずれも名誉職である。同社は毎年1回3月に大会を開き、前年度の社務を報告し、新年度の社務を決定し、委員選挙を行う。毎月1回理事会と委員会を開き、社務を処理する。大会で決められなかった内容については、理事会が決定するが、必要に応じて臨時会を開くことができる。社屋はさしあたり上海に設置する。

湖社成立後、その発展は非常に順調であった。1924年6月に成立大会を開いた時、同社の社員は114人だったが、1925年3月の第1回年度大会の時には、すでに237人に倍増していた。以後も次第に増加し、1000人余に達したという[(18)]。委員会は総務・交際・経済・調査・講演・教育・出版の7部に分かれ、機関誌『湖州月刊』を出版した。1924年末には上海聖母院路慶順里9号に社屋を借りた。理事会は1年に常会10回、臨時会1回が開かれ、委員会は常会11回、臨時会2回、出版委員会2回が開かれた。理事会・委員会の事務規定をいずれも決定して公布した。1925年3月29日には北京路宋家街聯誼会で第1回年度大会を開催したが、社友と男女来賓合わせて300人余りが一堂に会し、空前の盛況であった[(19)]。

湖社の「縁起」には次のように言う。

> 我が湖州は古より人文の粋を集め、江浙の要衝に位置し、稲粱は東南に称えられ、桑蚕は世界に名高い。力を合わせて功を図れば、名実ともに進歩を見るだろう。ただ湖山の暗澹、人事の浮沈、この国運の危機にあって、ますます郷情の散漫たるを見る。その由来を探れば、指を屈して数え得る。蓋し吾が湖属の同郷は、郷里にあって自衛の機能に乏しく、外地にあって協力の組織に乏しい。貧困を告げる相手もなく、俊才も官に挙げられず、水利は損なわれ、交通は妨げられ、実業はなお新機を禁じ、教育は守旧あるのみである。これらを合わせると、憂いはますます切になる。これを繰り返して、どうして人と競えよう。これは団結の力が足りず、提唱の道が至らないためで、既存の状況が因循ばかりなのを、革新するのを延期することはできない。同志を

糾合し、湖社を組織し、自治の趣旨に基づき、郷里の公益を図ることを願う。私においては、名節を磨き、勢利に左右されず、公においては、事業に励み、公正を責務とし、群智群力を集め、労苦怨恨を厭わず、奮闘の決心を下し、民治の先導とならん。坐して言い、さらに起って行うものを貴ぶ。今日より始め、一郷より推して一国に及ぼすものは、これを初基とする[20]。

表面的には、湖社は一般的な在外同郷人の親睦組織に過ぎず、清末以来雨後の筍のように出現した各地の同郷会と特に異なる点は無いように見える。しかし事実はそのように簡単ではない。上海在住の湖州人士は、すでに「湖州旅滬同郷会」を組織していたのである。ただその活動は一貫してあまり活発ではなかった。湖社成立直前、湖州旅滬同郷会には改組の話が持ち上がっていた。1924年2月10日、つまり旧暦の正月初六日、同会は新年祝賀会を開いたが、その際に厳濬宣が「年来、会務を実施していない」ことに鑑み、改組を提案した。2月17日午後2時、海寧路の湖州会館で同郷大会を開き、「起草委員を選び、会規を改訂し、体勢を立て直す」ことにした。張静江・陳藹士・楊譜笙・厳濬宣・戴季陶・張蕊英・余寰澄・王均卿・張君謀（乃燕）・湯国梨・湯済滄の11人が連名で宣言を発表し、次のように改組発起の趣旨を説明した。

我々は上海在住の湖州同郷人が、人数の点でも事業の点でも日々増加していることに鑑み、互助と協力のための団体を、この機に乗じて推進しなければ、自助・利他の基礎を打ち立てることはできないと考えた。しかし既存の湖州旅滬同郷会は、いたずらに会規を備えるものの、曖昧陳腐な言葉を並べるのみで、全く実際の役には立たず、年度大会や職員の改選といった大事についても、上海在住の同郷人たちが見聞することはあまりなく、会員も久しく拡充されず、全く時勢の必要に応じることができない。ここに同志を集め、改組を発起し、団体の結束、感情の一致を期し、会員の平等と財政公開主義に基づいて、上海在住同郷人の三育〔徳育・智育・体育〕の進歩、各業種の発展、互助事業の改革を図れば、会務を発展させ、同郷人にその利益を受けさせることができるだろう[21]。

この日の会議で起草委員11人を選び、そのうち集まった楊譜笙・王一亭・潘公展・湯済滄・凌銘之・厳濬宣・陳果夫・沈聯芳の8人が「その場で会規を起草し、概ね方向性が定まった」ので、24日に第2回会議を開くことにした[22]。しかし、第2回会議の際には、楊譜笙・潘公展・湯済滄・厳濬宣・陳果夫の5人しか集まらず、周慶雲・沈聯芳・黄溍臣

らも用事があって他所に行き、他の委員も現れなかったため、結果として委員の半数に満たず、やむなく3月1日に延期することとなった[23]。起草委員の消極性は、同郷会組織の改組と利用に関する彼らの意見の分裂を示しており、それが別に湖社を組織する重要な契機となった可能性が高い。

湖州旅滬同郷会は1906年に成立したもので、発起人は南潯「八牛」の周家の周慶雲と沈聯芳らで、上海で最も早くできた同郷会の一つであった。1910年、周慶雲はさらに王一亭、沈聯芳らと資金を集めて上海に湖州会館を建設し、自ら総董に就任した。1924年、南潯旅滬公会が成立すると、やはり周慶雲が会長となった[24]。しかし湖州会館完成後、湖州旅滬同郷会はむしろ形骸化し、活動も長期にわたって停滞した。1923年冬、上海在住の湖州人の間に、会館が「葬式」しかしないことを憂いて、同郷会の改組を求める声が上がった。湖州旅滬同郷会の改組について、沈聯芳は反対し[25]、周慶雲も乗り気ではなかった。彼らの改組目標・計画と、他の人士のそれとの間に齟齬があったからだともいう。その表れの1つに、周慶雲が湖社の組織準備に加わっていないということが挙げられる。第1回湖社委員会は潘公展・楊譜笙・陳藹士・周由厘・陳果夫・戴季陶・湯済滄・厳濬宣・張乃燕・周越然・鈕師愈・沈田莘・周頌西・邵叔嘉・張静江・湯充土・張廷灝・李伯勤・沈士華・陳希曾・范霞軒の21人からなり、周慶雲の名はない。また南潯人士も張乃燕・周頌西・張静江・張廷灝の4人しかいない。

戴季陶によれば次のとおりである。

> 我々湖社は、もともと普通の同郷人たちが、偶然の機会があって組織したものである。当時みなが気にかけていたのは、湖州人には団結力がなさすぎるので、たとえ団体を作っても、死人のためだけのものになってしまい、生者のためのものにはならないのではないか、ということだった。だからみなを団結させ、湖州のいま生きている人のための団体を組織しようと考えたのである。この「夜明け」の観念が、湖社のもともとの意図であった。発起の後になってはじめて、このような「夜明け」の観念を共有する何人かで、生者のために何をするのか、その条件をいくつか仮定して、湖社の意志表明とした。それが湖社章程で規定した職務である[26]。

これは湖社と湖州旅滬同郷会を区別し、湖州旅滬同郷会が存続しているにもかかわらず湖社を組織しなければならない理由を述べたものである。

湖社は湖州府6県の人士を集めて発起したと称していたものの、実際には最初から社員のほとんどが呉興籍で、『湖州月刊』の記事も9割が呉興社会について論じたもので、読

者からの投稿で、内容が偏り過ぎており、「社が湖州を名乗っている以上、6県の状況や事業について、均等に調査し発展させるべきである」、湖社が「今後各県から社員を集め、全ての建設事業について、各県に普及させる」よう希望する、と批判されるほどだった[27]。潘公展が湖社と『湖州月刊』を代表してこれに次のように回答し釈明している。「我々の目的の達成には、もちろん6県の同志がみな湖社に加入して協力してくれることが必要であり、6県の事業の均等な発展を求めることが必要である。しかし会の設立の際に、呉興1県を除く、他県の同志の加入者が非常に少なかったのである。あるいは彼らがこの会を知らなかったからかもしれない」。そして、すでに様々な措置をとっており、「社員の資質の向上と、6県すべての人士に湖社を身近な事業だと思ってもらえることを常に願っている」と告げる。さらに投稿者に対し、湖社に加入して会務の発展に寄与してほしいと訴えている[28]。しかし、状況にあまり変化はなかったようで、1932年には呉興籍の同社社員は1090人に達し、全体の90%を超えた[29]。

南潯は呉興さらには湖州の筆頭であり、湖州における南潯の地位から見ても、上海における南潯商人の実力から見ても、湖社の初期の職員比率は明らかにふさわしくないものだった。果たして、湖社の1925年度大会の選挙では、南潯人の委員は21人中6人に増え、もとの4人以外に周佩箴と周君常が選ばれた[30]。『湖州月刊』は張廷灝が主編を務めることになった。

しかし、政治的見解と文化的感覚の違いによって、南潯人士の中でも湖社と湖州旅滬同郷会のどちらを取るか選択は異なり、周慶雲・龐莱臣・劉承幹らは湖州旅滬同郷会に留まり、周佩箴はうまく立ち回って両方に参加した。湖社内部でも、南潯の張静江らと呉興の陳氏一派の間では、それぞれ自らの利益を考慮することもあった。これは後の国民党内における湖社人士同士の争いの前兆であった。

Ⅲ　湖社と国民党

湖社は同郷人の親睦組織を自称しており、『湖社月刊』は「湖州の様々な事業について、研究・改良の方針を取り、正確・公平な討論を行い、世界の学識を導入し、我ら湖州人が発奮してことをなし、湖社設立の趣旨を実現する」と述べていた[31]。しかし、湖州旅滬同郷会が併存していたため、湖社は当然ながら、人脈による分裂という以外に、自己の位置づけを明確にしなければならなかった。「縁起」では、自治によって民治の実現を図り、一郷から一国にまでそれを押し広めれば、糸口が見えてくる、と述べているが、やはりいささか漠然としている。戴季陶の「我対湖社的感情和対湖社的希望」は、特にこの点につ

いて論じ、「観念的団体意識」から「概念的団体意識」へと向かう必要性を主張している。湖社は既に成立したので、「夜明け」の観念はすでに過去のものとなり、「もし内容をさらに充実させ、団体の意識を、精確な概念を用いて完成させなければ、我々湖社は、自由な意志を持つことができず、したがって独立した意思と行動を持つこともできない。言いかえれば、団体の人格を備えることができないのである」。ある団体が、観念的団体意識から概念的団体意識時代へと進むには、道徳的・知的な障害を乗り越えなければならない。そこで、戴季陶は湖社成立2年目以降、次の2点を認識しなければならないとする。

> 一、湖社は目下いまだ概念的団体意識を持たない。みなは概念的団体意識確立のために大いに努力しなければならない。とりわけ、目下最も必要なのは、最高概念を決定することである。二、概念的団体意識成立以前には、我々の団体はいまだ未成年時代にあるのであり、団体の名義で対外的な主張を行う際には、政策を宣伝するというのではなく、あくまで参考に資すという態度を取らなければならないのだということを認識しなければならない。団体内には多くの研究組織を設けて、団員相互で訓練を積まなければならない。

戴季陶の中心的な概念は「地方事業とは何か、どのようにしたら発展させることができるのか、どのように発展させるのか、発展したら何をするのか」といった命題にあったが、一方で次のような点についても明確に提起している。「なぜ湖社を組織しなければならないのか。湖社を組織した目的が何か、という問題には、もちろん湖社を「概念的団体意識を持つ団体」にすることの意味は何か、という問題も含まれる。我々湖社は、地方団体ではあるものの、地方同志団体であって、地方同郷団体ではない。だから我々が目下しなければならないのは、〔前述の〕一に挙げた努力なのである」。10年後、つまり1936年には、「我々湖社が対内的・対外的に独立した意思と行動を持つ団体になることができている」ことを望む。そして次のように宣言する。

> もし今日みながこの努力の範囲をわきまえず、まず内的修養の努力を積むことを怠るのであれば、恐らく湖社が長きにわたって存続することはできず、たとえ長く続いたとしても、その存在が意味をもつことはないだろう。私自身の湖社に対する興味さえ、次第に失われることだろう[32]。

湖社を地方同郷団体から地方同志団体に変えるには、最高概念を決定しなければならな

い。これは明らかに、湖州地方のみに収まるものではなく、必然的に他の地方の同志とのつながりが生じることになる。特に1920年代の中国は、正に様々な政治勢力の大角逐の時代であり、戴季陶は団体の名義での対外主張は当面は宣伝の態度を取らない方がよいと考えたものの、湖社は講演の義務を定め、1925年には宣伝に従事することを決定した。同志団体であるからには、対外宣伝には必ず基本となる思想がなければならない。湖社の命を受けて湖州で宣伝活動を行った潘公展の講演題目は「国家主義与中国」であった。潘は次のように述べる。

> 中国では革命以来13年間、政治は日々暗黒に向かい、民生は日々憔悴し、戦争が絶えず、匪賊があふれている。頑迷固陋の徒は、革命は余計なことであったと言い、共和を悪政と誹っている。しかし、諸君は、中国が今日のような状況に陥ったのは、革命が悪いのではなく、革命の不徹底が悪いのだ知らなければならない。共和が悪いのではなく、共和が十分に理解されていないことが悪いのだと知らなければならない。言いかえれば、中国は13年来、共和を名乗り、中華民国を名乗りながら、実際には依然として民と国が一つになっていない。……国家の主人公たる国民が、みな国事を他人事だと思ったからこそ、外国・軍閥・官僚・劣紳・土豪・軍隊・匪賊がほしいままにふるまえたのである。……今後、中国を救うには、根本的な治療薬が必要であり、国家主義の提唱がそれである。国家主義の提唱によってのみ、国民の愛国心を振るい起こすことができ、人民が真に国を愛することができるようになってはじめて、我々の願うように、国事を自らの責務とみなすようになるのである。国事の紛糾を一刀両断できるかどうかは、すべてそこにかかっている。

一般的な国家主義と必ずしも同じでないのは、潘公展が、国家主義が中国を救う「唯一の主義」だという理由は、「様々な方法で我が中国固有の国民性を陶冶し、我が中国国民固有の感情を繋ぎ合わせ、これを大いに発揚し、それによって亡国滅種の危機を脱することだけにある」点である。まず平民革命を起こし、全ての軍閥勢力を打倒し、民意に基づいて民治の政府を組織してはじめて、対内的・対外的根本政策を定めることができるのである。「したがって結局のところ、国家主義を提唱して中国を救う方法、その最初の手段は、宣伝事業に尽力し、国事は国民が自ら決めるものであるということを国民に理解させ、平民革命を起こすことでなければならない」(33)。これは明らかにまもなく国民革命を開始しようとしていた国民党のための輿論操作を企図したものである。湖社と国民党は志を同じくする協力者であり、地縁的紐帯の他に、政治的紐帯でもつながっていた。一郷から一国

にまで押し広めるというのも、北京政府を打倒し、真の中華民国を打ち建てるという意味であった。

それだけでなく、湖社の発起は、国民党の権力の中心が地縁的に広東から江浙へと移りつつあったこととも対応していた。この移動は、一方では国民党の権力者の世代交代によるものであったが、もう一方では、国民党が次第に全国を統一しつつあった趨勢とも関係していた。湖州出身の人材は非常に多く、互いに推薦しあって政界に入り、蔣介石の江浙グループの地位向上に伴って、湖社社員は国民党・国民政府内にあって重きをなした。戴季陶の願いは果たしてかなったのである。1934年、湖社が成立10周年記念大会を開くと、蔣介石・林森・呉鉄城・張群・邵力子・張静江ら国民党の重鎮たちが匾額を贈った。蔣介石は「桑梓敬恭、忠烈永式」(郷里が謹んでことをなし、その忠烈は永く範となる）と書き、呉鉄城はその「発揚民治」を称え、邵力子はその「含閎広大、為民前鋒」（徳が広大で、民の先鋒となる）ことを称えた。1935年、国民党第5次全国代表大会では、湖社から10人が国民党中央委員会委員に当選したが、そこには陳果夫・陳立夫・戴季陶・張静江・褚民誼・潘公展・朱家驊・徐恩曾といった、長期にわたり湖社の中心にいた人物が含まれていた。湖社はこれによって名声赫々、上海で最も影響力のある同郷団体の一つとなった[34]。劉大鈞は『呉興農村経済』執筆の際、次の点に着目している。

> 今日、呉興が国内で占める地位は、昔日の最盛期の湖州に劣るものではない。往時は「富は東南に甲たり」として全国に名を知られたが、今日では呉興人士は政治・学問の上で重要な地位を占めており、世間からも高く評価されている。革命以来、呉興は人材を輩出しており、あるいは軍費のために献金した張人傑〔静江〕氏、革命に身を捧げた陳其美氏、……などであり、現在では、張人傑氏が建設委員会委員長を務めているほか、考試院院長戴伝賢〔季陶〕氏、国民政府主計処処長陳其采〔藹士〕氏、実業部部長呉鼎昌氏、江蘇省政府主席陳果夫氏、中央委員陳立夫氏、浙江省主席朱家驊氏、前行政院秘書長褚民誼氏、上海市社会局局長潘公展氏は、いずれも名を知られた湖州人士である。……してみると、湖州のような今日没落した土地が、なお多くの人々の注目を集めているというのはおそらく、土地はそこが生んだ人物によって評価される、というものではないだろうか[35]。

名前が挙がっているのはほとんどが湖社の社員である。そのため、湖社は実際には会館や同郷会とは異なる、政治的色彩を帯びた地域的団体であったとする論者もいる[36]。

前期湖社においては、陳藹士が一貫して主席委員あるいは委員長を務めており、それ以

外の人々がそれぞれ各部の仕事を担当していた。彼らが国民党と関係をもつようになったのは湖社によってではないが、湖社は両者が日常的に連絡を取り合う場を提供し、両者の関係をさらに強化し、またそれによって国民党内で互いに推薦し合うということが可能となった。区区たる湖社の社員が権力闘争の熾烈な国民党中央で重要な地位を占めることができたのは、彼ら個々人の孤軍奮闘だけによるものでは決してない。

しかし、地縁関係は外に向かって作用する時には互いのつながりを強めるが、内部の意見の一致を保証するものではない。国民党権力の上層に加わった湖社社員たちは、その立場の違いによって、またそれぞれの利益のために、明に暗に、折につけて争い合った。張静江は浙江省主席在任中、陳果夫･朱家驊と相次いで衝突した。同じく湖社の主要メンバーだった陳果夫・陳立夫兄弟（CC 系）と朱家驊の間の対立は特に熾烈だった。朱家驊は若い頃に張静江の世話になっており、また周柏年とも親戚だったので、南潯と関係が深かった。日中戦争中、同郷であり同門でもある朱家驊と陳兄弟は交互に国民党組織部と国民政府教育部の長となり、人事・政策において互いに排斥しあい、水火相容れず、という状態に至った。

朱家驊と陳兄弟の派閥対立は、双方が公開の場では何度も否定したものの、実際には広範に存在していただけでなく、相当に深刻なものだった。朱家驊派は、国民党内での勢力では CC 系に及ばなかったので、他の派閥と連携せざるを得なかったが、文教界、特に大学部門では、朱家驊は比較的清廉であるという声望によって、相当に深い基盤と、広範な人脈を有していた。日中戦争中、国民党は全ての大学に区党部の設置を開始するが[37]、この時ちょうど朱家驊は、陳兄弟と交代の形で、国民党組織部長の職に就いたところだった。両者ともに、一方で新たに掌握した部門から相手を排除しようとし、一方では新たな権力資源と既存の人脈を利用して、元の部門における勢力を維持・拡大しようとした。組織部の朱家驊派は CC 系の旧路線を変更しようとし、教育部では CC 系が朱家驊の人脈を排除しようとし、双方の対立は日増しに先鋭化し、衝突は激しさを増す一方だった。大学は両者の利益が交錯する最大の領域であり、双方が自らの独占物と見なしたため、両派の争奪の焦点となった。

1944 年 5 月に開かれた国民党第 5 届中央執行委員会第 12 次全体会議で、朱家驊と陳兄弟は組織部と教育部の職を交換したが、これは両派の人事の再シャッフルを引き起こし、両派の対立をさらに激化させた。双方とも、すぐに自らの掌握する領域から、敵方の手の者を排除し始めた[38]。1944 年 8 月 7 日の王子壮の日記には次のようにある。

最近、政治の風気が日増しに悪化している。生存競争激化の表れであろう。朱騮先

〔家驊〕が組織部を去って以来、その派閥に属する人員は次々と新任者によって淘汰され、朱が仕切っていた中英庚款〔義和団事件賠償金〕董事会もすでに廃止が決まった。中央秘書処の管轄する文化駅站は、朱の腹心の賀師俊が仕切っていたので、中央秘書処は財政緊縮という名目で宣伝部に移管した。私はこれらの機関を支持するものではなく、調整の必要があったのも事実である。ただ朱氏が下野してから、次々とこのような挙に出たことは、「水に落ちた犬を打つ」の誹りを免れない。朱氏の部下にあっても、「走投に道なし」の悲哀を免れない。このような現象は、対立をより深め、衝突をさらに激化させるだけであり、党国の前途を思うと、憂慮に堪えない[39]。

王奇生は西南聯合大学を中心とする研究の中で、国民党が日中戦争中に、基本的には大学には基層党組織を設けなかった戦前の方針を改め、それによって国民党が大学教員と学生の間に急速に勢力を拡大し、有利な立場を占めたことで、共産党地下組織の活動が制約されたことを明らかにしている。これは1945年に国民党第6次全国代表大会で意外にも軍隊と学校の党部の廃止が決定されるまで続いた。全国各学校の党部が相継いで閉鎖されると、共産党の大学内における活動が急速に活発化し、両党の大学内における勢力図は瞬く間に逆転した[40]。

学校の党部の廃止は、蔣介石が提案したものである。

我が党が軍隊内にもともと設けていた党部は、3カ月以内に一律廃止する。各級学校内には、党部を設けず、三民主義青年団は政府の所轄に改め、青年の訓練を担当するものとする。6カ月以内に、後方各県・市および各省の臨時参議会は、法律に基づいて選挙を行い、正式な民意機関としなければならない。政治結社法を制定し、各政治団体が法律に基づいて合法的な地位を獲得できるようにする。我が党党部が訓政期に行っていた国家行政に関わる業務は、今次代表大会休会後、順次政府に移管する[41]。

1945年5月18日、国民党第6次全国代表大会は「憲政の実現を促進するために必要な各種措置案」を決議し、軍隊と学校の党部を廃止し、三民主義青年団を政府の所轄に改め、後方各県・市の参議会に法律に基づく選挙を実施させ、政治結社法を制定した。これは憲政実施のための準備に見えるが、実際にはその背後に、明らかに、CC系と朱家驊派の争いをどのようにして抑えるかという隠れた理由があった。第6次全国代表大会開幕に際し、CC系と他の各派の権力闘争は白熱化し、蔣介石の目の前で展開されるにまでいたったため、蔣介石は断固たる措置を取らざるを得なかった。もちろん対立を解消することは不可

能なので、次善の策として、可能な限り衝突を和らげ、回避するほかなかったのである。しかしその結果、国共両党の大学教員・学生に対する影響力は瞬く間に逆転し、いわゆる英米派の大部分の教授も急速に左傾化することになった。彼らは国民党に完全に失望してはいたものの、共産党について必ずしも理解していたわけではなかった。そのため彼らが倉卒の間に行った取捨選択は、国民党の大陸統治の崩壊をもたらした後に、共産党と彼らの間の磨り合わせをよりいっそう困難にすることにも繋がった。

おわりに

南潯の富の蓄積が社会と結びついたことで、近代中国の様々なレベルの多くの出来事が南潯と錯綜した関係をもつこととなり、その間のもつれが、時には党派や国家の命運を左右することさえあった。このような無限に広がる複雑な関係は、現行の各学術分野の視点からそれぞれ個別に観察する場合には、重視に値しないかもしれない。しかし全体を総合すると、彼我の呼応状況や、それらがより大きな影響力を持っていたことが明らかになる。ここから以下の数点についてさらに検討することが可能だろう。

一、地方あるいは区域社会研究の勃興にはもともと二つの意味があった。第一に、中国は面積が広く、区域ごとの差異が顕著なため、漠然とまとめて論じることが難しい。範囲を縮小するのは、正確な観察を行うためである。第二に、研究のレベルを基層社会に移せば、全体の把握が容易である。しかし実際に行う際には、多くの場合、主に社会経済史・都市史といった領域横断的ないくつかの分野に分けて行うため、区域社会の様々な階層の内在的結びつきを明らかにすることはできず、下層社会研究あるいは社会経済研究になってしまい、全体性がさらに失われてしまう。

二、流域経済が育んだ富裕地区は、中心を形成し、その影響範囲は広く、人間関係や影響力は地方の範囲を超えた。南潯人士は湖州・蘇杭・浙江・上海さらには全国で、政治・経済・文化界の多くの要職を占め、その身分は時には都市、時には農村、時には商人、時には農民というもので、区域・農村といった視点からのみ見るのは適切でない。いわゆる城紳と郷紳というのも、人により時によって異なる。さらに某籍の士紳とは、同地から県城、省都、京師に及ぶもので、官と紳は連続して一体となっている。清代の官制では本籍回避を行っていたので、督撫以下各級の官員は、その土地の士紳とうまくやっていかなければならず、一度紛糾や衝突が起これば、多くの場合その土地出身の在外官紳から攻撃や弾劾を受け、その地位にいられなくなった。中国の歴史は長期にわたる離合集散であり、大小の文化が混じり合っている。だから中国の問題を研究するには、全体を実際に扱わな

ければならず、一部を切り取ってそれを拡大するという手法は適切でない。

三、中国は倫理社会であり、とりわけ人倫関係、たとえば血縁、地縁、姻戚、さらにそこから派生する同窓、同年、同僚などの紐帯を重視する。これは中国社会を理解する鍵であり、単なる批判の対象とすべきではない。南潯は範囲が狭く、豊かで、各家にそれぞれの得意分野があったため、互いに関係を持った。多くは血縁や婚姻関係で、たとえば劉家と蔣家、張家と龐家などである。これはそれぞれの地位の向上に役立っただけでなく、互いに利害関係をもつことで、一体に結びつき、様々な形式の団体・結社を通じてさらにそれを拡大することで、影響力を全国に及ぼしたのである。

四、区域史・地方史・都市史・市鎮史などの研究には、事物を見て人を見ないという偏りがあり、歴史の中心はやはり人であり、人の活動は機械ではないので、歴史は社会の規律ある運動と人の意志を持った活動との統一体であるということを見落としがちである。揚州の豪商と同様、南潯は富によって文化的・政治的に各方面の人士を引きつけ、以後の出来事に影響を与えた。たとえば朱家驊はCC系との争いの際に、沈兼士らを頼りにしたが、これは北京大学の縁があったからだけでなく、南潯とも関係があった。南潯人士の活動範囲は蘇杭滬にまで拡大し、関係構築の範囲も大幅に拡大し、社会的なつながりはさらに広がった。このような足場をもったことで、政治情勢がどのように激変しようとも、その社会的な地位や身分は相対的な安定を維持することができた。龐青城の娘の龐蓮は康有為の子の康同凝に嫁いだが、これは近代中国の変動の激しさをかなり典型的に示している。各家の関係の網を展開していくと、思いもよらない結びつきが次々と出て来るのである。

五、湖州商人の没落について、研究者の多くは糸業への固執や保守的な経営といった点から分析する。実際には、経済の転換は確かにその要因だが、中国の商人は政府や政治との関係が密接に過ぎたこと、学術文化を尊んだこと、そして均分相続制の存在も、その富が長期的に存続し難かった原因である。揚州の塩商、広州の行商、山西票号の運命もおおむねよく似ている。新興産業の民族資本であっても、同じ原因で潰れなかったものはむしろ例外的である。まして湖州商人が巨額をつぎ込んでいた上海などの不動産は、やはり近代の社会・政治情勢の激変の影響で暴騰暴落を繰り返したため、彼らに多大な損失をもたらした。

【付記】本稿は、桑兵「南潯・湖社与国民党――南潯与近代中国之二――」『東方学報』第85冊、2010年3月、の訳である。

註

(1) 游歓孫「近代江南的市鎮人口――以呉興県為例」『中国農史』2007年第4期。
(2) 求良儒「近代浙江糸綢業民族資本的発生与発展」中国人民政治協商会議浙江省委員会文史資料研究委員会編『浙江文史資料選輯』第32輯、浙江人民出版社、1986年、63頁。
(3) 劉大鈞『呉興農村経済』中国経済統計研究所、1939年、123–124頁。
(4) 林黎元「四象八牛――南潯糸商十二家族」前掲『浙江文史資料選輯』第32輯、30頁。
(5) 樊樹志『江南市鎮――伝統的変革』復旦大学出版社、2005年。同書は、1990年に出版された『明清江南市鎮探微』を書き直したものである。
(6) 今日一般に言われる「四象」とは劉・張・龐・顧、「八牛」とは邢・周・邱・陳・金・張・梅・邵である。「七十二狗」には、南潯の4郷が含まれる。鎮にある家の多くは、糸経行の経営で富をなしたものである。邱茂泰・邱蓋茂・邱義昌・邱徳升・沈涂記・沈永昌・沈永豊・沈天長・李恒徳・李万順・李徳茂・呉晋昌・呉其昌・呉永記・朱寵茂・朱広隆・荘恒慶・邢豊記・卜同昌・韓怡昌・桂致和・潘泳記・潘大順・張豊泰・張恒豊・徐世興・徐恵和・許仁昌・謝森元・劉通徳・龐同順・丁昌記などである。4郷には、北小圩張家・橋下張家・呉楼張家・斜橋（土闘）金家・五家亭盛家・石匠（土闘）邱家・七里村温家・子嘶湾陳家・蔵谷橋王家などがあった。
(7) 袁英光、劉寅生『王国維年譜長編1877–1927』天津人民出版社、1996年、194頁。
(8) 前掲桑兵「先鋒与本体的衝突」を参照。
(9) 一説では朱家驊は潯渓公学に在籍したとするが、これは誤りである。1907年夏に正蒙学社が閉校した後、朱家驊が転入したのは南潯公学である。胡頌平『朱家驊先生年譜』伝記文学出版社、1969年、3頁。
(10) 馮自由『革命逸史』第2集、中華書局、1981年、165頁。一説には推薦者は蔡元培あるいは褚輔成だったという。
(11) 陳永昊、陶水木主編『中国近代最大的糸商群体――湖州南潯的“四象八牛”』浙江人民出版社、2001年、108頁。
(12) 天仇〔戴季陶〕「龐青城事略」『民権報』1912年5月8–9日。
(13) 陸剣『南潯金家』浙江人民出版社、2006年、59–63頁。
(14) 戴季陶「我対湖社的感情和対湖社的希望」『湖州月刊』第2巻第1号、1925年4月1日。
(15)「本社第一年度之社務報告」同前。
(16)「旅滬湖州人組織湖社」『申報』1924年3月31日。
(17)「旅滬湖人組織湖社」『民国日報』1924年3月31日。どちらの記事にもそれぞれ誤植がある。
(18)「湖社歴届社員人数表」前掲郭緒印『老上海的同郷団体』646頁。ただし同表には数字に一部出入がある。
(19)「本社第一年度之社務報告」、「社務報告（三月份）」『湖州月刊』第2巻第1号、1925年4月1日。
(20)「湖社之縁起与簡章」『民国日報』1924年6月4日。
(21)「湖州同郷会行将改組」『申報』1924年2月17日。
(22)「湖州同郷会継続開会」『民国日報』1924年2月23日
(23)「湖州同郷会会章起草続誌」『申報』1924年2月25日。
(24) 前掲陳永昊、陶水木主編『中国近代最大的糸商群体』116–117頁。

(25) 華「湖州旅滬同郷会糾紛的歴史」『湖州月刊』第3巻第1号、1926年5月15日。陳果夫の編になる『湖州旅滬同郷会改組紀録』(上海市檔案館蔵)も参照。
(26) 戴季陶「我対湖社的感情和対湖社的希望」『湖州月刊』第2巻第1号、1925年4月1日。湖州旅滬同郷会が生者でなく死人のためのものになっている、という表現に関して、嘯「我在入湖社前的一段事――“湖州旅滬同郷不会”的談話」『湖州月刊』第2巻第6期、1925年9月、に次のように生き生きとした描写がある。作者は、極めて団結を好む湖州人と自称するが、昨年末に上海に寄った際、上海在住の同郷人が湖州同郷会を設立したと聞き、わざわざ挨拶に出向いた。しかしどうしたことか、どこを探してもみつからなかった。ようやく同郷人に出くわしたので話を聞いて、同郷会ができて1年になるのに、会長・会董すら決まっておらず、まだ一度も会を開いておらず、会費を払っただけだということをはじめて知った。同郷会を探し当てたが、誰もおらず、職員も見つからず、その場にいた1人の老人が、棺材を買うのか、と訊ねてきた。もしそうなら、急いで沈聯芳を探せ、とのことだった。後に旧知でやはり同郷会会員の張君を見つけたが、彼の言うことには、この会は心から同郷会をやろうという人たちと、実際には同郷会などいらない人たちが一緒にやっていたので、その結果、今春に双方の意見が対立して激しい筆戦になり、心から会をやろうという人たちはかっとなって会を放り出してしまい、逆に同郷会などいらない人たちが会を仕切っている。だから永遠に会が開かれることはなく、「同郷不会」とでもいうべきありさまだった。そこで、心から会をやろうという人たちが組織したのが湖社なのである。
(27)「上海大学王宇春君来函」『湖州月刊』第2巻第2号、1925年5月1日。
(28)「復函」同前。
(29) 前掲郭緒印『老上海的同郷団体』646頁。
(30)「社務報告(三月份)」『湖州月刊』第2巻第1号、1925年4月1日。
(31)「本刊招請各埠代銷処」『湖州月刊』第1巻第6号、1925年3月1日。
(32) 戴季陶「我対湖社的感情和対湖社的希望」『湖州月刊』第2巻第1号、1925年4月1日。
(33) 潘公展「国家主義与中国」同前。
(34) 前掲郭緒印『老上海的同郷団体』。
(35) 前掲劉大鈞『呉興農村経済』126頁。
(36) 前掲郭緒印『老上海的同郷団体』は、湖社と会館・同郷会の共通点と相違点に言及し、湖社を「資産階級的」同郷自治団体と位置づけている。
(37) 戦中の大学における国民党組織の拡大については、王奇生「戦時大学校園中的国民党――以西南聯大為中心」『歴史研究』2006年第4期、に詳しい。
(38) 国民党内における両派の対立については、王奇生「“六大”前後的派系政治与精英衝突」『党員、党権与党争――1924–1949年中国国民党的組織形態』上海書店出版社、2003年、の記述が最も詳しい。馮啓宏「〈蔣檔〉書翰中的国民党派系傾軋」『民国檔案』2007年第1期、には、1942年6月12日に陳果夫が蔣介石に送った密告書が引用されているが、これはより直接的な証拠と言える。
(39)『王子壮日記』中央研究院近代史研究所、2001年、第9冊317頁。
(40) 前掲王奇生「戦時大学校園中的国民党」。金以林「戦時国民党教育政策的若干問題」楊天石、黄道炫編『戦時中国的社会与文化』社会科学文献出版社、2009年、桑兵「1948年中山大学易長風波」『学術研究』2008年第1期、も参照。
(41)「新華社評論国民党第六次全国代表大会」『解放日報』1945年5月30日。